

地域情報（県別）**【大分】外来拡充のため慢性疾患患者のトータルケアを目指す-筑波貴与根・おおいたメディカルクリニック院長に聞く◆Vol.2**

2020年10月9日 (金)配信 m3.com地域版

江戸時代後期から200年以上続く医家筑波家の7代目となる、おおいたメディカルクリニック院長の筑波貴与根氏。2018年に開業医から勤務医に転身し、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響でマイナスからのスタートとなる2020年4月に同院の院長に就任した。院長になって特に注力していること、COVID-19の影響と感染症対策、今後の予定や目標などについて聞いた。（2020年9月3日インタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら

——2020年4月に院長になって特に注力していることは何ですか。

当院の立ち位置と言いますか、19床のベッドを持つ地域の有床診療所として、ある程度の急性期、例えば肺炎、イレウス（腸閉塞）、下血など、当院で診られる範囲のものは診ていきたいと思っています。近くに大分県立病院や大分市医師会立アルメイダ病院といった大きな病院もありますし、専門に特化した病院もあります。そうした所いつでも患者さんを送ることができる体制を作りつつも、当院でできる範囲内のは診ていきたいですね。その方向性を可能な範囲内でスタッフと共有し、全員でクリニックを盛り上げていきたいというのが今の自分の考えです。



おおいたメディカルクリニック院長・筑波貴与根氏（クリニック提供）

また、診療所には大病院にはないフットワークの良さがあると思います。例えば急性腹症の患者さんに「CTを撮るよ！」と言えばすぐに検査ができる。また下血の患者さんに対し「内視鏡を直ぐに！」と言えれば複数のスタッフがすぐに動くことができる。緊急性を要する中で手遅れになることはあってはならないですが、治せるものは当院で治し、あるいはある程度診断を付けたところで大きな病院に患者さんを送りたいと思っています。

——クリニックの体制について教えてください。

常勤医師2人を含めてスタッフ全員で25人ほどいます。離職者は少ないので働きやすい職場なのかもしれません。

当院はもともと50床規模の病院として機能していた広さの建物なので、内視鏡検査室を含め、全体がゆったりとした作りになっています。仕事をするうえでスペースのゆとりが効率アップにもつながっています。入院は、全19床中、個室が7つ、2人部屋が4つ、4人部屋が1つの構成です。



おおいたメディカルクリニックの外観（クリニック提供）

——新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響で経営的に厳しくなっているところもあるようですが、いかがですか。

院長に就任した4月は検査件数も入院患者数も少なく、マイナスからのスタートでした。ただ、5月は多少落ち着き、6月から持ち直して7月と8月は前年並みでした。

どこの医療機関もそうかもしれませんが、「外来患者さんを減らさないように頑張ろう！」と職員にも伝えていきます。今のところ、外来数や検査数も回復してきているのかなあとと思います。

それにしても、風邪や発熱の患者さんが本当に減りましたね。受診控えもあるかと思いますが、3月4月は季節の変わり目で、例年だと体調を壊した患者さんが多く来るのですが、今年は少なく、夏風邪の患者さんも少なかったです。やはりマスクやソーシャルディスタンスの効果が大きいのでしょうか。

——感染症対策についてはいかがですか。

それはもう他の病院と同様に、職員は出勤時に検温する、来院患者さんは玄関で検温する、発熱者は車で待機させて防護した服装で診察する、PCR検査は必要に応じて大分市PCRステーション（大分城址公園に設置されたPCR検査用の検体採取場）に依頼する、入院患者さんへのご家族の訪問はなるべく制限する、といった必要なことはすべて行っています。

——地域の医療機関との連携の状況について教えてください。

当院は診療所ですが、連携室機能としてソーシャルワーカーの職員がおり、総合病院や近隣の病院・クリニックからの看取りを含めた患者さんの入院や転院の手続きなどをこなしています。

また、院長就任当初、地域の医療機関にご挨拶をさせていただきました。COVID-19の影響であまり積極的にはできませんでしたが、可能な範囲内で挨拶に伺い、お互い顔を合わせたことで良好な連携ができて良かったと思います。

——先生の診療スタンスといいますが、どのような医師でありたい、あるいはあってほしいとお考えですか。

基本的なことですが、患者さんとの会話を大切にしています。医者が強者、患者が弱者という態度にならないよう患者さんの訴えをよく聞き、患者さんに分かりやすい言葉で説明するように心掛けています。

患者さんの痛みや訴えに寄り添うことで、そこから疾病の早期発見、早期診断につなげられたら一番だと思っています。信頼関係を作ることによって再び体調が悪くなった際に「ここでまた診てもらいたい」と思ってもらえるような医療をしたいですね。数あるクリニックの中から当院を選んでくれたので。実際、患者さんには「悪くなったらいつでも電話していいし、いつでも入院治療もできるからね」とお伝えしています。そこが有床診療所の強みでもあります。



内視鏡検査を行う筑波貴与根院長（クリニック提供）

——国や県の各種医療施策についてはどうお考えですか。

地元の豊後大野市で開業していた当時、約8年間、豊後大野市医師会の副会長をしていました。行政と開業医との橋渡しの仕事も多く、県南地区の地域医療構想計画の委員もしていましたので、国の考えも開業医の先生方の思いも良く分かります。行政主導でベット数削減を前提にした会議でしたが、双方の言い分も分かるだけに、妥協点というか、話し合って歩み寄ることが必要かなと私は考えています。コロナ渦の影響で方針は変わってくるかもしれませんが、県や市と一緒にやっていかないと医療は成り立ちません。

地域医療構想にしろ、COVID-19対策にしろ、基本的に自分は国や県の考えに対してこうすべきといった意見は今のところはないですね。例えば、大分市のPCR検査用検体採取場（大分市PCRステーション）の取り組みはとてもよいと思っていますし、保健所などの行政も大変忙しく仕事をこなしてるなかでも、電話対応は事務的ではなくキチンと説明してくれています。

——今後の予定や目標についてお聞かせください。

新患を含めた一定の外来患者を確保することが生命線だと考えています。そして、できる範囲内で慢性疾患の患者さんはトータルに診ていきたいと思っており、そのためには外来担当医師の補充が必要になるでしょう。内視鏡検査の強みは活かしつつ、それ以外の部分で外来診療や入院患者の充実を図っていきたいですね。当院は市内中心部に近くてアクセス面はすごく良いですし、内視鏡検査の症例が豊富ですので、特に内視鏡の腕を磨きたい方にはすごくいいと思います。

今後は、医師補充も含めて診療体制を充実させ、外来と入院と検査のバランスを取りながらアップデートに医療に柔軟に対応し、クリニックの経営を安定させていきたいと思っています。

◆筑波 貴与根（ちくば・きよね）氏

1986年に福岡大学医学部卒業後、大分医科大学第一外科（現大分大学医学部消化器外科）に入局。東京築地国立がんセンター研究所病理部、臼杵市医師会立コスモス病院外科部長を経て、1996年に筑波クリニック（大分県豊後大野市）を開業。2018年7月におおいたメディカルクリニック（大分県大分市）に副院長として入職し、2020年4月に院長に就任。

【取材・文＝堀 勝雄】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

